

# 將軍の世紀

やまうちまさゆき  
山内昌之  
武蔵野大学特任教授・  
東京大学名誉教授

「第三十回」松平定信は「運のよい人」か

天明大飢饉と浅間山噴火は田沼政治に終止符を打つ。  
権力を掌握したのは、才智に富む二十九歳の老中であつた。



(上) 吉宗の孫にあたる松平定信  
(下) 御三卿、一門家の徳川家斉

徳川記念館蔵

## 一、天明の殿中刃傷

若年寄は、老中の上御用部屋のすぐ西隣りの次御用部屋で執務した。その日も老中が午の刻の終わり(午後一時頃)に退出してまもなく、若年寄たちも打ち連れて時斗(土圭)之間に出る。新番所前廊下から、いつものように中間として栝梗之間に抜けようとしていた。老中と若年寄は「表」の政治機構の最高役職であり、御用部屋も江戸城の「表」にある印象が強い。しかし、実際には「奥」と呼ばれる將軍の生活空間の南端に置かれ、「表」との境界は時斗之間にあつた。その「口奥坊主」が「見張り検査スル役ナリ」とされた。老中には登城後に御用部屋へ入る前、三奉行・大目付・目付との用談を新番所溜や新部屋などで済ませた(『幕儀参考稿本』『松平春嶽全集』第一巻)。

天明四年(一七八四)三月二十四日、刃傷事件は「奥」の御用部屋から「表」に出てすぐの二座敷近くで起きた。下手人は新番の佐野善左衛門政言であり、斬られたのは新番を統括する若年寄の田沼山城守意知(おきち)にほかならない。將軍の率いる五番方の一つ、新番は平時には將軍の身辺護衛役を務める。ところが、刃傷の詳しい原因は今も分からない。一説には、斬られた意知が同系のよしみで政言から借りた系図を返さず、人事昇進の約束

も反故にした遺恨とも、あるいは乱心ともされる。

意知の死亡は父の老中・田沼主殿頭意次の権力を弱めた。親子が同時期に御用部屋に入り、子への老中職継承も約束同然だったのは幕政史に類を見なかった。ところが、「やみの夜に光かがやく七つ星夜明けてみれば跡かたもなし」(『田沼狂書』、『列侯深秘録』所収)となった。刃傷の戯れ歌はもつともなのだ。七曜は田沼の家紋である。十代將軍家治の時代ともなると、孔子が述べた「文事の有ものは必武備あり」(文武兼備)との教えは希薄になっていった(『史記』孔子世家)。三人の若年寄は意知に襲いかかった佐野を取り押さえ、殿中の監察に当たる目付二人も茫然自失のままだった。四十疊敷の中間には、若年寄の退出を見送る勘定奉行、町奉行なども立っていたのに彼らは何をしていったのか。結局、佐野を羽交締めにしたのは、離れた処から駆け付けた七十歳の大目付・松平対馬守忠郷なのである。

將軍家治は、若者らのふがいなさに怒った。三人の若年寄に対して、老中列座で「取計らひ方もこれあるべき儀に思召し候」(取り押さえる術もあつたらうにと御不審になられる)、よく言つて聞かせよという上意が達せられた。中間で最も近くにいた目付の跡部大膳良久と松平田宮恒隆は厳しい処分を受ける。意知は城中をはばか

り鞘から刀を抜かなかつたばかりに数か所の疵を受けた。もし目付らがすぐ押さえつけたなら、意知も深手を負わず命も助かつたかもしれない。「御役柄別して不心掛と思召し候、これによつて御役御免、寄合に仰せつけらるるなり」。目付でも柳生主膳正久道(通)は、対馬守の組留に続いて刀を取り押さえた。そこで「御咎の御沙汰」は受けず、以後は念を入れて仕事をするように逆しがあつた(『田沼家一変』『翁草』三期22、巻百八)。

直前まで佐野も詰めていた新番所の四名は当人を押さえもせず不埒だと、「御番御免」のうえ小普請入りを命じられた。彼らは佐野を一度は止めようと立ったものの、番所を離れるのをはばかり「席にかへる」のがよいと判断したという。しかし刃傷が面前で進行しているのに、新番所に戻るとは武士として致命的な失態である。

家治は老齢の松平対馬守だけを「神妙に思召され候」、つまり称賛に値すると褒めた。彼には二百石加増の沙汰が下りた。七十歳の老人が二十七歳の青年を押さえつけたのに、「ほこり顔」もせずゆかしいと評判をとつた(『藩翰譜統編』巻十一「田沼譜」)。若年寄の米倉丹後守昌晴は、田沼と離れて用談で時斗之間に居り、表の騒ぎに気づき「奥」の安全のために中間入り口の戸を閉めたと弁明する。「奥」につながる新番所前廊下あ